

精読と多読

- 精読を踏まえた多読を -

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：読書によって身に付くことは何だとお考えですか。

A：(林明夫：以下省略)

- (1)私は、読書によって身に付くのは「思慮深さ」だと考えます。読書を通して、世の中のことやいろいろなものの見方を学ぶことができます。さらに、自分自身を振り返りながら深く考える力、つまり思慮深さを読書で身に付けることができます。
- (2)この読書に加えて、新聞を毎日のように丹念(たんねん)に読む力が身に付けば、自分で考える力と批判的思考能力が身に付くと私は考えます。

Q：読書にはどのような方法があるとお考えですか。

- A：(1)ことばの意味を一語一語確かめながら一冊の本をじっくりと読む「精読」と、数多くの本を読む「多読」の2つの方法があると考えます。
- (2)「精読」とは、学校の教科書を学ぶように、一語一語の意味を確かめながら正確に、精密に一冊の本を読み進める読み方だと私は考えます。
 - (3)一語一語、一文一文、一章一章を「ああ、これはこのような意味・内容なのか」とよく納得しながら一冊の本を読み終える。意味のよくわからない語句に出会ったら、おっくうがらないで辞書を用いて調べることも、「精読」には欠かせません。
 - (4)一冊の本をじっくりと時間をかけ、また、ノートを取りながら読む。一回読んで著者が何を言いたいのがよくわからなかったら、時間をおいて2回、3回、本によっては5回、6回と繰り返し読むことも、「精読」には欠かせません。
 - (5)このように、学校の教科書を用いて1つの科目を学ぶのと同じように、正確に、また、精密に本やテキストを読むのが「精読」です。

Q：塾長はどんな本を「精読」しましたか。

A：大学生のときは法律の勉強をしていたので、法律の条文や教科書、参考書、判例集、論文集などはかなり「精読」しました。夏目漱石や内村鑑三の講演集、福沢諭吉の自伝なども興味があったのでかなり詳しく読みました。今も、中国の古典である「論語」、日本や世界の古典、日本や世界の歴史の本を、少しずつですが毎日一章一章かなりていねいに読んでいます。

Q：「精読」によって得られるものは何ですか。

A：(1)一つ一つのことばを、時には辞書で意味を確かめながらていねいに読み進めますので、著者つまり書き手が用いることばを「理解」するようになります。その結果、「ことばの数」、「語彙(ごい)の数」、英語でいう「ボキャブラリーの数」が少しずつ増えるのが「精読」の効果の

一つです。本をじっくりとよく読む人は、読まない人に比べて知っていることばの数が多いために、学校の教科書を読むときも、先生から授業を聞くときも、すべての科目のテストの本文や設問に接するときもよく「理解」でき、その結果、学力が高いように私には思われます。

(2)本を詳しくていねいに「精読」することにより著者の考えが深くわかり、「ああ、これはこう考えればよいのか」と様々な考えに接し、それを「理解」するようになります。それによって、自分を振り返ることや自分の未来を見つめ直すこと(省察、リフレクション)もできます。

Q:「多読」とは何ですか。

A:(1)いろいろな分野の本を数多く読むことだと私は考えます。

(2)1人の人が著した一冊の本を「精読」したあとに、その人の書いた本を次から次に読むのも「多読」です。私は、夏目漱石や漱石の友人であった正岡子規の本を読むのが好きです。漱石や子規の何冊かの本をていねいに「精読」したあとは、2人が書いたものを数多く読むようにしています。何冊かていねいに「精読」したあとに同じ著者の本を「多読」するのは、著者の考えに親しんでいるので楽しいものです。皆様もぜひ試して下さいね。

(3)「精読」した1つの分野の本をどんどん読むのも「多読」です。例えば、同じ歴史の本でも、日本史もあれば世界史もあります。世界史の中には、東洋史もあれば、西欧史、アメリカ史、ラテンアメリカ史、アフリカ史もあります。東洋史の中には、中国史、ベトナム史、フィリピン史など国別の歴史があります。日本史や世界史、国別の歴史にはそれぞれ古代史、中世史、近代史、現代史があり、それらはさらに政治史や産業史、文化史などといくつにも分かれます。

(4)自分の興味や関心に合わせて、様々な分野、英語でいう「ジャンル」の本をどんどん読む。これが「多読」だと私は考えます。

Q:「多読」は何に役立ちますか。

A:(1)世界が一気に広がるのが「多読」です。私はスペインの現代文学が好きで、スペイン在住の木村裕美さんという翻訳家の先生が1~2年かけてじっくりと翻訳したものをよく読んでいます。それらを読むと、バルセロナの中世から現代の歴史や様子がよくわかります。文章と文章をつなぎ合わせると、絵や映像を見ているようになります。

(2)樋口一葉の小説を読んでいると、明治時代の東京の下町の様子が目に浮かびます。

(3)時代や土地などの制約を一気に取り払い、世界を見る目を一気に広げてくれるのが「多読」です。

(4)ただし、何回も申し上げて恐縮ですが、「多読」をしてこのような状態になるのは、何冊かの基本的な本を「精読」してからだと思われれます。

Q:最後に一言どうぞ。

A:(1)「精読」や「多読」をして自分の心に触れる語句や文章に出会ったら、それらを「書き抜き読書ノート」に書名、著者名とともに書き抜いておくことをお勧めします。

(2)書き抜いたお気に入りの語句や文章を年に何回か読み直すと、その本を読んだときのことが思い出されます。

(3)自分のお気に入りの語句や文章は、何回も読み直すうちに、自分のものの考え方に影響を与えることがあります。人生の応援団になってくれることもあります。また、日本語と同じように自由に読むことのできる外国語を1つでも身に付けると、日本語とは全く違った別の世界が

広がりますよ。

(4)「精読」と「多読」を併用した読書は、何歳になってもできます。皆様の人生の宝物となるような本に少しでも多く出会えますようにお祈りします。

(宇都宮大学大学院工学研究科客員教授)

2012年9月20日記 -